



詩誌 骨おりダンスっ  
Vol.08

巻頭骨

4 野村 龍  
Honey (ホネ)

寄稿

6 田中 庸介  
五月のサンタ

9 小野 絵里華  
「なすななに花をたむける」

12 海埜 今日子  
黒のメデューサ

14 小笠原 鳥類  
野球 (ではありません)

ダンサーズっ

48 兼柳 綾  
ふれだすにつぼん

50 疋田 龍乃介  
もぐら天国

52 金山 大地  
(続・二)失題、即ち闘争マシン漂流記

56 金子 鉄夫  
ワラビーワラビー

58 鈴木 一平  
アフタートーク (テイク2)

# CONTENTS

詩 誌 骨 お り ダ ン ス っ Vol.08

連載

17 山田 亮太 カニエ・ナハ 橋上  
TIP! の3歩進んで2歩下がる

33 河野 聡子  
ハロー

34 小田原 のどか  
むりえわ

寄稿評論

36 広田 修  
タケイ・リエ小論

迷考書簡

41 鈴木 一平 金子 鉄夫  
迷考書簡 Vol.1

短歌

61 中島 裕介  
予測変換機能によるインプロヴィゼーション

ホネカイブっ

64 飯塚 距離  
岩田憲生、超過、超過、台風

68 編集後記

# 卷頭骨

か ん と う こ っ

ホネ  
Honey

野村 龍

穏やかな魚を食べて 太陽をほどいたら  
荒れ野から 水母の福音が流れて来た

Rainer Maria R は いつものように  
やわらかな蠟燭にネーブルを灯し

虹色の滑らかなピアニストが  
硬い殻のなかに閉じこもる時

降り注ぐ 透明な溜息は  
言葉のないポエジーを抱き締める

《雪の欠片が読んでいるのは  
少し熔けはじめた 光のムニエル》

濡れた御使いは 何の前触れもなしに  
くすんだ金の風を産む

甘い鱗の翼が  
今や寝ぼけた茸にまで備わり

煙の董は  
瞳の奥でひっそり開いた蝶の香りと一緒に

懐かしい心臓に  
たつぷりと注がれる

寄

カ

稿

コ

ウ

## 五月のサンタ

田中庸介

何ともいえずまぶしい

五月の岸辺に

きらきらと

碎ける舞台がある

そこにあるべきものが

なくなっている、あるいは

覆われていて見えない、

舞う人のゆびさきが

ちらちらと

指し示す、「私を みて」

の声。からだを見てほしい見てほしいと誘っている、

でも嘘、

なにも、べつに、そこまで見てほしいわけではない、

でも見てほしい、

見て。

おれたちの日常は

氷の、床である。

氷床である。

南極大陸に広がる氷床そのものが、

だだっ広くあるような、平坦なありよう。

色物のわたしは、たぶんもう

用がない。頭のとっぺんから足の先まで

演ずることばに厚く覆われて、

でも大丈夫、もうすっかりわたしは、

色物のわたし、

(ほえつ、

目があっちゃったよ、

どうしよう、お客さんと目があっちゃった。

顔を隠してもことばを隠しても

固有の表情は、そこらじゅうからあふれ出ようとする

春のせせらぎのように、息せききつてあふれる、内側から

こぼれ落ちる花びらの赤がある

そう、

隠そう隠そうとしているのに

初夏の氷床はめぎめていく

そう、

隠そう隠そうと言っているのに

固有の声は筒状に抜けていく

荒くなつた息の間合いにふと

無防備な内面から何がまろび出たのか、

あんな貧相な肉体が、どうしてあれほどまでに

おれたちのあこがれをかきたてたのか、

宇宙のすきまを充たそうとするかのように

最後の大聖堂に生き残ろうとするかのように

その踊り手はおれたちを誘った

おれたちはあのころ、

一体どこへ突き抜けようとしていたのだろう

どうしてあれほどまでに

おれたちの日々は美しかったのだろう

だがライオンのような現実が

みるみるうちに襲いかかり  
おれたちの眼のうるおいを、  
最後の一滴までしぼり取ったではないか

それでも、あのくるおしい身体のある  
風景はどうして少しだけ、ほんの  
少しだけ、あのころのように、  
うるんで見えたのだろうか？

さびしいフェイッシュな官能の鳩におは  
しばらくの間ゆうぐれの星のようにまたたいて誘う  
やがてはまた、おれたちの絶望の櫓に乗って  
ついにはついには天空の方向へと溶けるだろう

五月の岸辺に、  
ちらちらとした一瞬のまぶしさがある  
その花びらを追っていくように、季節外れの  
サンタが歩く



## 「なずなに花をたむける」

小野 絵里華

子供たちがお葬式ごっこをしている。のび切ったパンツの紐みたいな春の午後だった。なにを  
しているの？ 教えない。教えてよ。おしえない。なんで？ 意地悪そうとなんがったあごを  
した女の子が、親しげに、意地悪に、こつちをじつと見つめて笑う。名前は？ あ、な、た、  
名前なに？ 名前だよ！ 言わないとおしえない。やだよ、秘密。私も教えない。おしえない  
い。でも子供らがお葬式ごっこをしているのは明白だった。真ん中に女の子が仰向きになっ  
て眼を閉じている。別の子らが彼女を囲んでいる。手には摘んだばかりの草花。眼を閉じてい  
る女の子の胸には、雑草や桜の花が乗せられていた。

真ん中で眠る死体の女の子は、とても可愛い顔している。長い睫毛と大きな黒目がすてきだ。きつ  
と私はこんな子供を生むだろう。そしてこんな子供に何かを奪われるだろう。春は目の前でぼ  
んやりしている。意地悪なあごの女の子は、まるで死体の彼女の護衛のように、私に向かつて  
名を名乗れ！と騒いでいる。横で一人の乱暴そうな男の子が立って私達を見ている。私達とい  
うより、私を。部外者の私。春の憂鬱を肺いっぱい溜め込んだ私。桜色と灰色はともよく  
似ている。お前、名前なに？ 名前は？ 名前！ 名前だよ！ 男の子に後ろから木の棒で殴ら  
れた。痛ッ！ なずな。なずな、だよ。私の名前はなずな。

春の日に憂鬱なのは、買ったばかりの新しい柔軟剤がイマイチな香りだったからでもあるし、  
古くからの友人の連絡先をなくしてしまったからでもあるし、日記を書こうと思っているのに  
一文字も書けないからでもあるし、そのどれでもないのかもしれない。生まれてから一度も私  
は私のなにかを全肯定したことはなかった。だからそのことを日記に書いたほうがいいような  
気がした。ただゴミになるのと、一度形になってからゴミ箱に捨てられるのでは、少しだけ違  
う気がした。蛇口からこぼれ落ちる水滴分くらいは。それらは宇宙のゴミ箱に行くんだと思う。  
私は自分の名前を探そうとした。最初に必要なのは名前だから。胃薬ではなくて、名前だ。

夜になれば、植物たちが大胆に呼吸をし始める。呼吸の水滴が浮かぶ。私にしか見えない。植  
物もちゃんとお風呂に入る。皮膚呼吸する。おしゃべりしている。なにか言っている。当たり  
前だと思っていた。でも違うみたいだ。植物は動物ではなくて、むしろ鉱物に近い。そんなこ

とは知らなかった。私はずっと植物は動物だと思っていた。だからこつそり川に捨てたのだ。私の記憶で糊付けをして。(殺されたんだよ、彼女は。)

水溶性の思い出の中をゆらゆら泳いでいたのは、たぶん、日記に書くべきだった断片なんだろう。私には世界が動物クッキーのように見える。ぽろぽろ言葉になって落っこちてくる。たぶん不味くて食べられないと思う。けれど、世界は動物クッキーだ。

もう一度子供たちに会いに行く。なずなは別名ぺんぺん草。けれど、早い話が雑草で、別に誰の興味の的にもならない。でも、とても繊細な容姿をしている。小さな小さな小さな花びらみたいな葉っぱが、ぴ、ぴ、と空にむかって小躍りしていて、だからとても可愛い。でもそれはさらに別名貧乏草で、そう言われれば、確かに汚そうだとも思う。犬のおしっこがかかっている。私はいつかのこんな季節に家の近くの道路脇に咲いていたなずなを引っこ抜いた。確かに手はぬらぬらした。でも引っこ抜いた。人殺しをしている気分になって少し後悔した。手にもったなずなはお母さんにあげた。ねえ、お母さん、きれいでしょ。お母さんは私が出た後、なずなを捨てた。なずなは貧乏草だから。お母さんにとっては、犬のおしっこと同じだったのかもしれない。

子供たちの姿はもうない。昨日遊んでいた場所に翌日もいるとは限らない。世界はどんどん進んでしまう。私の体とは反対回転で廻ることだってある。私の影が踏みつけられることだってある。男の子は私を殴った。痛かったはずだけれど、痛みはもうどこにもない。私の名前はね、名前、うん、なんだろうね。

桜がせかいに満ちていた頃、私は夜中に目を覚ました。植物たちがうるさいからだ。よほどどこかに行きたいのだろう。私に話しかけられても困る。ええ、可愛いです。可愛いですとも。あなた方はとても可愛いです。そうすれば、植物は安心して死ねるのだろう。小躍りしそうな夜空の下で、植物たちはせつくすしている。

なずなは本当はなずなで、なずな以外にはなれなかったのだろうか。例えば、あざみでもよかったですなのに、とても可笑しいでしょ。そんなことばかり繰り返していたので、恋人はあきれ死して自殺した。腕を伸ばして別の体に触れる事と、植物に話しかける事はたぶん違うんだろう。私は黙っておもらしをした。

すべてという事はたぶん何もないってことと同じ。もう少しまともな質問にするべきだ。わたしのどこが好き？ とかそういう類のこと。植物についてばかり考えていると足を失くしてしまうよ。恋人は私の好きなどころを三つ答えて自殺した。それは三つの部位だった。三つ答えたのは、回答が三つしかないからではなく、たくさんあって答えきれないだろうから、私が三つに絞ってあげた。あれは優しき。優しきにだって犬のおしっこがかかっている。唇、太もも。あと一つ、あと一つは、どうしても思い出せない。

どうしても、思い出せない。

だから、私は、

なすなな花を手向けた。

## 黒のメドゥーサ

海埜 今日子

あかるいけしかたがまちのぞまれていた。くるりとつつんで、わたしにあげたの。だいにだいにうつつにせずめ、からんだ髪の毛の、そのちぎれたようなかんしよくが、あなたにとつての、さいごだったのだと、ちかいあしたか、とうのむかしに、ささやくようなかゆさがよすがで。なんだかさつけないのね、かれにとつても、うけつがれるのであつたら、わたしのなんて、うきくさなのか。こんなしゅうちやくをみたことがあります。めどうーさ。あなたのあいじょうぶかき、ぬばたまのけしいん。

わたしはうねるみとおしなのだとこえにだします。ほそいかぜが、ぬめぬめとからみつくのは、うろこのきせき。いえ、やはりしつとだったのでしょうか。しんそこ、けされたものたちがうかびたくつて、あなたをねむり、ひきずるの。みぞおちに、こすれるように、のたうつて。もうそれだけで、ゆくえしれず。ところで、うきよにもどりたいので、まだ、けさないで、めどうーさ。なびく髪がべつのはなしをしたがつて。

たのしいさりかたが、ほとぼしった。すつと、うけとめ、むせるよ  
うな、うつつのなかで、せきこんで、なびいたのなら、そばにいて。  
しずめたものが、たにんのなかで、髪をさそつた。きつと、くらさに、  
そまりたいのだと、きりとつてみた、なぞつてみた。そんなふう  
うねりをくろく、よこたえたいと、だれかのなかをしゅうしんする。  
すみきつて、しらばんで。めどうーさ。じょうあいに、にぐるもの  
がありましたね。

かぎすようにこえをしぼつてみたのです。うつつにだつたら、ばき  
ばきと、ふりみだして、そんなはげしさを、きょうにうかべ、とお  
いあしたを、むかんけいそうに、でも、とてもほしがつてね。どん

どんいきものらしく、なんだか、とつても、ねたましき、そめあげて、あなたのなんて、なみうつちかいよ。髪もそろそろ、ごつそり、うつせみおもって、ぬけたらいい。ね、めどーき。ねふるように、みえなさについてしたためて。

やさしいくらがりがおもいだせないほど、ぬればいろ、べつとりとまきついて、こえをしぼって、たいせつにたいせつにうきよをふるわせ、のびはじめた髪、そのうたうようなかんしょうが、わたしにとつての、だつぴなのだと、あなたに难道いわせたのだろう。べつのはなしを、いくどもたばねて。しらばんだうきくきがわたされました。しゅうちやくするなら、わたしのなんて、たにんぎょうぎ。もうすぐしんそこふみをむすぶよ。したをいれて。めどーき。あなたのかんじょうたかぶる、ひつせきのこくいん。

## 野球（ではありません）

小笠原鳥類

左側から水槽が回復していた紫色のサメを飼っている水槽「うー、うー」と道路で倒れて言っている。その後の病院で調査（検査か）でペンギンがわからない原因がわからない、と言う「できるだけ大きく口を開けてくださいねー」「あ、開かないのか」と言つて歯科医が笑っていた。ピアノを演奏する階段の上の人たち、それは語学の学校で、古い建物の窓からとても古い建物たちが人々が絵のように見えていました。石の、建物、なんだな……石の上でペンギンが歩いている。道路に血が少し多くとても冷たくてベツタリであった。それは糊のようであったのだし、夜に倒れる少し前に全ては紫色で頭痛の時間があった、原因がわからなくていろいろな機械を使った調査があった。ペンギンはどこでどのように歩いているのか、泳ぐアシカ……機械の中を移動していた。それは人を板の上に乗せて移動させる機械であったし、そこで撮影は映画だった。映画の一部分を見せるイヴェントで、南極の宇宙から来た怪物の映画も一部分が流れたので、そこで私は「緊張することが重要だと思います」と言いました（これは最近の話）。その日は倒れなかったが、十年以上前に私は倒れて、いろいろな検査をした。検査、という語を、水中のバクテリオファージのように思っている。近い場所に住んでいるのだから、ここから歩けるだろう、あの場所までは歩けるだろうと、でも全て紫色で、緑色ではなかった、左側から紫色が回復してくるし、気絶の数分か数秒がわからなくて、眠りの後に眠っていたようだったと思うようなとてもさわやかな、でも眠りじゃなかったと言っていることができるだろう可能だ妥当だ。可能性……見ていた人がいるのです。救急車を電話で呼んでくれたし、私はうーうーと言っていたし、救急車の中で名前と住所をボールペンで書きました、ボールペンの先でボールがグルグル回転していたんだろう、それはスポーツの一種だった、ボールを使ったスポーツで、スポーツは浮んでいる、数日後に道路のその場所で血の跡を見たようで、私は跡を残したなど金魚を思った。金魚は小さな生きもので、小さいから、宇宙の中でとても小さな生きものだが、道路で泳ぐことができる。道路で鯉を見た数字のような。背中を見たのだった水泳を見ている。水泳が緑色であれば古いプールで鄙びている、金魚のウロコがヒツと演奏したのだ、私は最近はずの本を見ていたのである。道路の跡が金魚のヒツという一瞬の跡のようで、水槽の中で池が泳ぐのが一瞬だった。ナマズもいる凶鑑で、ナマズには数百種類が、私はナマズのように道路で倒れていたのかもしれない。それは一九九九年だったが五月だったと思う。道路は川のようにだったと言わない。骨が透明でボーリングの玉のようである頭であると思った、なぜなら口が

開かないんだもの、いろいろな骨の写真を撮影しました、骨は水泳している。泳ぐ人の泳いでいる透明な、骨……それでも医者は「できるだけ口を開いてください」検査です、と言ったのだし、病院で私は数年間も後も関連する顎の検査をして、そう顎を強く演奏したのだ、それは

**打**

であった、倒れる時に頭の高さから頭が落下したのだと言う。

れ

ん

さ

い

# 連載





TIP! の

山田亮太  
橋上  
カニエ・ナハ

3歩進んで  
2歩不<sup>レ</sup>足る

© THIS IS A PEN!



(ルール)



はじめに三行書く

(ルール)

2



二行削って三行書き足す(何回繰り返してもよい)  
各タームごとに一篇の詩として完成させる

# 3



茂みの裏側で仮縫いの死で死ぬ  
指先でしかないあやまちを思えば  
祈りは眠り、眠りは祈る

(橘上)

# 4



鬼ごっこからかくれんぼへアルミニウムのねじれて耐える夜の缶蹴りへ  
茂みの裏側で仮縫いの死で死ぬ  
見つけたよいちばん広い広場  
差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

(山田亮太)

# 5



(ぺっしゃんこーら・ねっくすぺぶし)

鬼ごっこからかくれんぼへアルミニウムのねじれて耐える夜の缶蹴りへ

(ぺっしゃんこーら・おれんじふぁんた)

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

(ぺっしゃんこーら・さいだーみつや)

(カニエ・ナハ)

# 6



差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

猿を犯す猿と犯す猿で犯す

鬼ごっこからかくれんぼへアルミニウムのねじれて耐える夜の缶蹴りへ

鬼から隠れる猿の体は金属のように弄ばれる

(ぺっしゃんこーら・さいだーみつや)

猿である猿が猿でない猿を猿でなしのような猿まねで猿し、鬼でなしのような金属を鬼す

(橘上)



差し入る光に近づいていく鳥の声を待って  
猿を犯す猿と犯す猿で犯す  
鬼ごっこからかくれんぼへアルミニウムのねじれて耐える夜の缶蹴りへ  
吠えるんなら目を見て牙を剥いて片脚を前へ突き出して  
(ぺっしゃんこーら・さいだーみつや)  
日本でいちばんのお金持ちになる  
おじいさんおばあさん薬をありがとうそっちへ帰る

(山田亮太)



# 8



「今日知ったこと。フランスでは鬼のことを狼と呼ぶ。」 \*yamadaryouta / 山田亮太(TOLTA) [2012-01-24 00:59:42](#) (山田亮太のツイートより)

吠えるんなら目を見て牙を剥いて片脚を前へ突き出して

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

猿を犯す猿と犯す猿で犯す

鬼オオカミと狼オニごっこするかくれんぼから神隠オニタイジしまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek

日本でいちばんのお金持ちになる

おじいさんおばあさん薬をありがとうそっちへ帰る

モンマルトルでいちばんの大金持ちの猿になる (La plupart des singes devenir millionnaire à Montmartre

(カニエ・ナハ)

# 9



日本でいちばんのお金持ちになる

モンマルトルでいちばんの大金持ちの猿になる (La plupart des singes devenir millionnaire à Montmartre)

「今日知ったこと。フランスでは鬼のことを狼と呼ぶ。」 \*yamadaryouta / 山田亮太(TOLTA) 2012-01-24 00:59:42 (山田亮太のツイートより)

鬼オオカミと狼オニごっこするかくれんぼから神隠しオニタイジまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek)

「今日知ったこと。イスラエルでは数学者のことを猿と呼ばない」

猿マサクシヤと数カズをかぞえるたしざんタシザンから背理法サイリホウまで ( יוֹרְגִּי מִן הַאֵל תֵּן מְכֹנִים טַעֲוִיִּים לְעַמְּךָ וְלְאַרְצְךָ וְלְכָל אֲשֶׁר אַתָּה מְסַפֵּר וְלְכָל אֲשֶׁר אַתָּה עוֹשֶׂה )

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

猿を犯す猿と犯す猿で犯す

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

(橘上)

# 10



日本でいちばんのお金持ちになる

モンマルトルでいちばんの大金持ちの猿になる (La plupart des singes devenir millionnaire à Montmartre

鬼と狼ごっこするかくれんぼから神隠しまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek

滅びていく意味を覚えた機械の言葉で言ったんだ

「今日知ったこと。イスラエルでは数学者のことを猿と呼ばない」

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

猿を犯す猿と犯す猿で犯す

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

いずれ見えなくなるライン

不適切な語が含まれていますこの質問にはお答えできません

(山田亮太)

# 11



滅びていく意味を覚えた機械の言葉で言ったんだ  
猿を犯す猿と犯す猿で犯す

のどかな町です。君を殺してもいいですか？  
不適切な語が含まれていますこの質問にはお答えできません

「今日知ったこと。イスラエルでは数学者のことを猿と呼ばない」  
そして知る、じきに去る。イスラエル。誰もが故郷を、微分する積分する

猿。流離<sup>さすら</sup>える——

いずれ見えなくなるライン

shine —— helfgott rachamaninov  
日差し —— かみたすく、裸譜のまにまに

オオカミ オニ 鬼と狼ごっこするかくれんぼから神隠しまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek)

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

(カニエ・ナハ)

# 12



のどかな町です。君を殺してもいいですか？

不適切な語が含まれていますこの質問にはお答えできません

shine — helfgott rachamaninov  
日差し——かみたすく、裸譜のまにまに

猿を犯す猿と犯す猿で犯す

「今日知ったこと。イスラエルでは数学者のことを猿と呼ばない」

滅びていく意味を覚えた機械の言葉で言ったんだ

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

鬼と狼ごっこするかくれんぼから神隠しまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek)

猿。流離える——

うそをついたやうな昼の月がある(尾崎方哉)

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

(橘上)

# 13



分けられるメッセージの二度目は無限に三度目は無意味に  
不適切な語が含まれていますこの質問にはお答えできません

<sup>shine</sup>日差し——<sup>helfgott rachamaninov</sup>かみたすく、裸譜のまにまに

「今日知ったこと。イスラエルでは数学者のことを猿と呼ばない」  
つかんだまま

滅びていく意味を覚えた機械の言葉で言ったんだ

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

<sup>オニ</sup>鬼と<sup>オニ</sup>狼ごっこするかくれんぼから<sup>オニクイジ</sup>神隠しまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek

猿。<sup>ますら</sup>流離える——

これはそれは植物だ花火だ跳ね上がる朝だ

(山田亮太)

# 14



猿。流離<sup>さすら</sup>える——

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

「墓の裏側へ廻る」(尾崎方哉)

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

「茂みの裏側で仮縫いの死で死ぬ」(橘上)

のどかな町です。君を殺してもいいですか？

shine —— helfgott rachamaninov  
日差し —— かみたすく、裸譜のまにまに

つかんだまま

分けられるメッセージの二度目は無限に三度目は無意味に

滅びていく意味を覚えた機械の言葉で言ったんだ

これはそれは植物だ花火だ跳ね上がる朝だ

鬼<sup>オカミ</sup>と狼<sup>オニ</sup>ごっこするかくれんぼから神隠<sup>オニタイジ</sup>しまで (Pour tag et Wolf, pour se débarrasser des démons de Hide and Seek  
差し入る光に近づいていく鳥の声を待って

僕が生まれてくる朝だ

(カニエ・ナハ)



TIP!

are

山田美太

橘上

カニエ・ナハ





そして占拠された船に隠れているいま

おわることはないあいさつをかわしている

無重力のジャングルは湿った匂いがする

湿った緑とカラマンシーと硬い葉をもつ木の匂いがする

もぎとった収穫は

血液を流れる水晶で放送を盗んでいる腕の先の

手持ち無沙汰の指に握らせた

砦の地下を潜り堀を越え咲き乱れていた野生のラツパ水仙と

葉を落とした木々のあいだで一本だけ黄色い実をつけた木と

同じ匂いがした

閉じこめられた船のなかでヒーローの条件について話した

強いこと何よりも強いこと

何が何よりも強いのかは誰にわかるのか

恐怖やよろこびより強いものがほんとうにあるのか

あれはまだ

暗渠にいないのではないだろうか

守られた砦の深いところで入り組んでいる

そこからやってきたのだ

守られなくなかった

カラマンシーは。

たぶん朝だった

この占拠された船内で唯一自由な水を口にして

湿った循環する酸素を吸っている

ここにいるのはカラマンシーと

葉を落とした木々のあいだでひとつだけ

黄色い実をつけているようなユズ

はじめて出会った日は

中庭の向こうで

鮮烈な像がくりかえし点滅し

ほんの一瞬歌っていたようにみえたのだった

水のように透明に硬化した腕と

インクのしみがついた白いシャツの手

炭酸水の自動販売機

コインを入れる手がひらめいて

おまえなんて知らないし

何にも思っちゃいないのだと

儀式のように

そのはじまりはずいぶん遠くにいった

いまはたぶん朝だ

あいさつは漢字にしないでくれという

書けないから

口から出てくるあいさつもすべて

こつぱみじんのおまえにおごろう

宇宙がくだけてつぶれても生きのびるように。

そしてぼくらは反撃を開始する

たしかにおまえはいったのだから

いつしよにこの星を出よう

と。



# 寄稿評論

あ  
い  
う  
え  
お  
か  
き  
く  
け  
こ  
さ  
し  
す  
せ  
そ

## タケイ・リエ小論

広田修

タケイ・リエの詩集『まひるにおよぐふたつの背骨』は、詩を書くときの自我、あるいは詩を書くときにかかわらず、人間が本源的に備えている自我の在り方について、詩という形式の持つ直接性を用いて我々に訴えかけてくる。ところで「自我」とは何だろうか。

近代において個人の自我が確立したとき、それは、自己同一的で、連続的で、統一的なものとしてとらえられた。「自己同一的」とは、自らが大きな変化をしないということだ。自らに多少の変化があっても、その変化を自らに帰属させることができるということだ。つまり「自己」という枠の中に常に自己が収まっているということである。「連続的」とは、途切れないということだ。途中で消えたりせずに在り続けるということである。「統一的」とは、ひとつの原理によって秩序づけられているということである。

そして、近代における自我は、個人内部において凝集するというベクトルと、社会によって要求されてくるというベクトル、その二つのベクトルによって形成された。一方で、自己というものを統一した原理で把握しようとする、人間の理性的・体系的な志向により、自我がまとめあげられる。他方で、自由や責任の主体・帰属先として、社会的な役割をしっかりと果たすものとして、個人の自我の確立が社会の側から要求される。

うっかりあなたを産んで 深く

思われなかった連打にむしばまれ

黒く焦げつくとき

まっぴるまから貝になる

貝は気が向いたときだけ舌を出すでしょう

(誘う水は体液に似ているし)

「岸」

さて、この引用部を見てみよう。この部分には、確立した思考や意志というものが希薄である。詩の主体は「うっかり」人を産んでいるわけであり、人を産むことについての深い思慮や強い意志は感じられない。「貝」は「気が向いたときだけ」行動する。「貝」の行動は気

まぐれであり、連続する決意のようなものは見当たらない。ところで、近代以降、自我をまとめ上げるものとして挙げられてきたものは、思惟や自意識や意志であった。ところが、タケイの詩には、思惟や自意識や意志の働きがあまり感じられない。思惟の働きによって自らの在り方を統一的に認識したり、自意識による反省を加えたり、意志によって自らの行動や外界を導いていったり、そういう働きがあまり感じられないのである。タケイの詩にあるのは、統一されていないものが、特に反省されるわけでもなく、ただなんとなく無秩序に感覚されていくという心象に過ぎない。そしてこの不統一な心象は、「連打」という言葉に象徴されるように、とぎれとぎれに、明滅しながら、進むとも戻るともなく発光するのである。

そして、この引用部において、詩の主体は「貝」になってしまっている。この「貝」は「貝である私」ではない。「私」とは異なるもの、「私」の同一性からはみ出るものとして、「貝」が存在し始める。詩における比喩は、日常言語における比喩とは多少その構造を異にする。日常言語における比喩は、あるものと他のものの類似性に着目し、比喩するものと比喩されるものを類似関係の相のもとで重ね合わせるものである。だが、詩における比喩は、類似関係を希釈化し、比喩自身が本体から独立した強度を持ち始めるのである。この引用部において、「貝」はもはや「私」と類似するものでもなければ「私」に従属するものでもない。「貝」それ自身がひとつの実体として存在と強度と文脈をまとい始めるのである。

以上から分かるように、タケイの詩に現れている詩を書く自我は、統一的でもなければ連続的でもなければ自己同一的でもない。自我を統一する、思惟や自意識や意志の働きが希薄であり、また、詩行はとぎれとぎれに心象を映し出し、さらに、自己が自己ならざるものとして溢れ出ていってしまったている。そして、このような自我の現れ方はタケイの「願望」ですらある。

私はずっと 結ばれるよりも

ほどかれたかったし

ほどかれたら生まれ変わって

だれかのための静物になりたかった

「黒目鳥」

「結ばれる」ということは、統一され、同一性が保持されるということである。そうではなく、タケイは「ほどかれ」たい、つまり、統一されず、自らの同一性からあふれ出ていきたいのである。

ところで、「結ばれる」という言葉は、視覚を連想させる。視野が「焦点を結ぶ」といった具合に。実際、近代の自己同一的で連続的で統一的な自我が一番親近性をもつ感覚領域と言えば、まずは視覚であろう。視覚は、「私」固有のパースペクティブ、つまり自我によって秩序づけられた視点を設定する。そして、目に見えるものは、自我によってこれこれのものとして認識されたり、距離がはかられたり、全体の構図が整理されたり、といった具合に統一されており、しかもそれは常に「私」固有の視点、といった具合に自己同一的であり、さらに、視界は日常の意識では連綿と続いていくものと思われている。だが、タケイが重視するのは視覚ではない。

「ひらくたびになめされあるいはなだめられむさぼるた  
びに抜けてくる皮膚を省略されたまま叫ぶわたしを囓つ  
ても囓つても潰れない身にほぐされかんじるまま剥かれ  
ることよ」

### 「Karnan」

タケイが重視しているのは身体感覚である。なめされたり囓られたり潰れたりする身体  
感覚である。身体というものは、思惟や自意識や意志にとつては、ある程度の他者性をま  
たものである。身体というものは、その可動領域が制約されており、また動かし方も制約さ  
れている。そして、身体感覚というものも、視覚とは違い、それほどの明瞭さを備えていない。  
ところで、タケイの詩に現れていた、自己同一的でなく、連続的でもなく、統一されてもい  
ない自我とは、身体の相において密かに現れていると言ってもよいだろう。というのも、身  
体というものは常に意識のくびきから外れて自己同一性や連続性や統一性を失いやすいもの  
であるからだ。我々は身体において、視覚ほど明瞭でまとめあげられた認識を行っているわ  
けではない。近代的自我とは対極にあるような詩的自我を表現しているタケイにおいて、視  
覚よりも身体感覚が重視されるのは当然のことであつた。

ところで、身体とは他人と共有されうるものでもある。引用部で、詩の主体は、他人にな  
めされたり囓られたりしているが、それは身体というものが、他人の身体と交渉をもち、他  
人の身体により侵されまた支配されうるものであることに基づいている。さて、他人と共有  
されうる身体といった場合、ここでは、身体の「かけがえのなさ」「固有性」「唯一性」が放  
棄されていることが分かるだろう。

棒は必ずくるくると回りだすのよとわたしは言ったのに  
あなたはわたしを回すためにゆっくり持ち上げてゆくか  
ら天井を眺めるように空を眺めた遙かむかしにみた空と  
現在の空の違いをおもっているからだがすでに折り畳ま  
れて持ち運ぶためのわたしがつくられてゆく

「水脈」

「わたし」は絶対不可侵な神聖なものなどではない。それは、「あなた」が「持ち運ぶ」のに適したように変化させられてもかまわないのである。身体における他者との交渉において、他者が「わたし」の身体を支配できる以上、もはや身体の固有性などというものはタケイの頭にはない。

ところで、視覚優位の近代的な自己同一的で連続的で統一的な自我というものは、自我の固有性・唯一性・かけがえのなさという思想と親和的である。一人一人がそれぞれ異なつて共約不可能な視点を備えていて、しかもその視点は統一され強固なものであり、その視点の源に唯一無二の自我が君臨する。しかし、身体感覚優位のタケイの自我は、決してかけがえのないものではない。それはいつでも他人によって侵されうるし、いつでも他人のための自我になり得る。自我の固有性の神話は自我がその足場を意識ではなく身体に移すことで崩壊するのである。

ところで、このような詩的な自我の在り方は、むしろ我々の自我の本源的なあり方を反映していないだろうか。確かに、我々は、かけがえのない存在でありたいし、自我をまとめあげたいし、社会からも自我の確立が要請される。ところが、本当はそのような近代的自我の衣装をまとうことに疲労しているのではないだろうか。詩は、哲学のような理論・体系志向ではないし、社会の要請に真つ向から応えるものでもない。詩はむしろ、哲学からこぼれおちるもの、社会の表舞台からは隠蔽されるものではないのか。哲学が把握する自我や社会から要求される自我は、なるほど自己同一的で連続的で統一的な自我かもしれない。だが、そこからこぼれおち、その裏側をなす詩的自我は、非同一的で、不連続で不統一なのではないだろうか。そして、その詩的自我にこそ、内圧と外圧から解放された、人間の自然なあり方があるのではないだろうか。

# 迷考書簡

め  
い  
こ  
う  
し  
よ  
か  
ん

新連載。骨おりダンスつ主幹の二人がなんとなく目  
に付いた詩を巡って考える、脱線と迷走の書簡集。



台所までオートバイをのりあげて  
息子がおりる  
見しらぬ挨拶をして――  
ふつとんだあと妻はおきあがる  
息子は二階にあがつて  
鍵をかける  
たおれたグラス棚のようには  
だれもおどろかない

迷考書簡、と銘打たれたこのやりとりの始めに、ぼくは何を考えていけばいいのかとても迷っています。大野新「見しらぬ挨拶」を読み、それについてぼくはあなたに何かを伝えなくちゃいけない。たとえばそれがぼんやりとしたイメージでしかない読者へ宛てるのならそれでいいのだし、結果的にそうなるにしろ、ぼくはまずあなたにこの詩についての何かを書かなければならない。それはどこか窮屈な感じがします。が、とにかく始めてみようと思います。

わたしは昨夜  
ふか酒のあと  
大声を発して町をはしった  
びわ湖がのぞめる陸橋のたかみまで  
見しらぬ車に挨拶しながらはしった  
大橋のイメージが  
点灯で浮く  
あのながい寝台めがけて飛んだ  
拋物線をゆつくり  
身ぐるみはがされて  
おちた  
はだかの妻がいた

腕に迅い擦過傷がある  
かれた滝のように  
すこしは精悍な目をしいえいるだろう  
さきほどから香辛料の曇を  
指の股にはさんで  
無意味な力をいれている

ひやむぎで

下痢もしているのだが

(大野新『見しらぬ挨拶』)

詩とは元々わからないもので、わかることを書いていく作業ではないのだという話はよく聞きます。そういうことを考えながら読んでいくと、どうも、息子の挨拶が「見しらぬ挨拶」であるということが、ぼつかりとこの詩の中で「わからないもの」として啞えこまれていくような気がします。息子に「見しらぬ挨拶」をされた語り手は、その光景に対してダッシュを二個引くことで何かを語ろうとして考えます。それは「見しらぬ車に挨拶することとは違います。自分ではなく息子がオートバイから降り、「見しらぬ挨拶」を自分がするのではなく息子にされたがために、語り手は答えなければいけない。けれど、語り手が何かを答えようとしてとどまるダッシュのせいで妻は「おきあがり」、妻に場所を奪われたために何かを答えることはできなくなり、息子はその隙に二階へあがつていったことにより答えることができなくなる。一方で、「見しらぬ車」は目の前をすくに通り過ぎていくので、語り手はただ反応を求めることなく挨拶をすればいいのだし、事実すぐに、何のためらいもなく「大橋のイメージ」について語るができる。

思うに、語り手は「見しらぬもの」に「よくしった何か（これは、それじたいがべつに見しらぬものであってもいいように思います）」をすることに関してあまり関心がありません。それより

も「よくしつた息子（かどうかはわかりませんが）」が「見知らぬ挨拶」をしてきて、語り手の反応を待つことなく目の前を通り過ぎていつてしまったことへの不快感か、不快感と呼ぶには少し違った胸のつかえに関心があるようです。タイトルに少し気を取られすぎたので、金子さんは、この詩で何か思いあたるところはあるのでしょうか？ よろしくお願いします。

鈴木一平

鈴木くんへ

手紙ありがとうございます。早速、読んでみました。まず、「見知らぬ挨拶」を読んで、僕がおもってしまふのは何よりも大野新、その詩人から外延的にひろがったネットワークです。鈴木くんもご存じかもしれませんが、大野新は京都の詩人です。京都は僕も何度か足を運んだ記憶から感じるところでは、関東といえれば関東ですが、さすがに長い間、都として栄えた場所だけあってまさに京都としかいえない雅な文化が鼻に付いたりする独特な場所ですね。そこで、大野新は長い間、今、年譜を見たところ本当に長い間、詩を書いています。その長い、詩人生活のヒダにこれまた様々な詩人が折り重なりました。名前を挙げていけば切りがありませんが、天野忠、清水昶、正津勉などですね。各詩人、一筋縄ではないかな。詩人ばかりでこれだけでも大野新の才覚がわかるってもんですね。と話が少々、ズレてしまいました。ですが、そう「見知らぬ挨拶」。僕はこの詩についてはまだまだ留保がありますが、端的におもってしまったのは見知らぬ挨拶、この記号の組み合わせにただならぬ不穏なものを感じたんですね。やはり詩には不穏な、何か人間の意識を脱臼させるような不穏なものがあつたほうが僕は好きですね。

見知らぬ挨拶、そもそも挨拶とはコミュニケーションがはじまる初歩的な端緒ですが、そん

な初期の段階から齟齬が生じているんですね。だって見知らぬものに挨拶されるんですから。これはコワイ宙ぶり感だとおもいますね。この作品の中身を覗けばどうやら家庭内での事らしい。しかし、こんな事なんて、書かれた時代はいざしらず、今は珍しくもなんともないでしょう。と僕はおもってしまう。東京に無数に犇めく住宅の屋根を剥いでみればもつと過酷な家庭惨劇が起こっているでしょう。普段、何気なく接している友達だって裏ではDVかもしれません。そういういえば全然、話が飛びますが昨日、久しぶりに松本圭二の「アストロノート」を読みましたよ。あの詩には大野新が書いた「見知らぬ挨拶」の現代版とでもいいいましょうか、「見知らぬ挨拶」を越えたメタ「見知らぬ挨拶」的な松本圭二の家庭惨劇が書かれていて心痛するものがありました。が、やはり「見知らぬ挨拶」然り、「アストロノート」然り、詩は裏を相手に書かれないうとくだらねーと言いましょ。ハイネじゃねーんだ。と綴れに最初の鈴木くんへの手紙をかきました。が、またお手紙ください。もう少し「見知らぬ挨拶」を読み込んでみます。

金子鉄夫拝

金子さま

関西の不穏さ、と言うとじゃあ関東は不穏じゃないの？ みたいなことを言われそうな気がしてなんとなく周りを気にしてしまう物言いかもしれませんが、ぼくも何度か京都に足を運んだ時に感じた地元とも東京ともつかない感じは同じ国内でも場所によって変わるものがあることに驚きました。下手に地方で栄えている場所だと国道に沿ってイオンがあつて、薬王堂があつて、サイゼリヤ、ガスト、知らない名前の店ではあつても交換の効くような店が並んでいるだけで味気がなくて、そこで詩を書くことが土着の

匂いを感じさせないような平板な印象を受けてしまうのですが、ああやってなんとなくでも異質さを感じる町があるというのはすごく良いと思います。逆に、東京そのものもぼくの視線の軸をずらせばあまりにも景色に文字が書かれすぎている、空の狭い町だと思えます。

正直に詩を書くこと、あるいは詩語を排したうえで、情報を詩に書いていくというのとはとてもむずかしいことであるような気がします、それだけで詩だけが持つ独特の雰囲気めたものを保つことはむずかしくなりますし、中身を書くことに固執してしまうと詩は自分からはなれてしまう。そうなると松本圭二『アストロノート』や田中宏輔『The wasteless land. VI』で書かれていた詩は、どうしてこんなことを詩に書いて、読んでいて思わず泣いてしまうような力を持っているのだろうと感動する反面、詩を書いている身から悔しい思いもします。この前読んだ高橋源一郎の詩論めいた何かにも松本圭二のことが書かれていましたが、そこに書かれている内容はともかくとして、引用されている松本圭二の言葉を読む限りでは、『アストロノート』に書かれている言葉にただよう切迫とした感じは、まさしく現実深く切り込んでくる言葉の力であるように思えます。

「見しらぬ挨拶」では、ことさらに現実のコミュニケーションにおける齟齬を「見しらぬ」と書いてしまうあたりで少し正直に書きすぎている印象もありますが、そうした現実根ざした恐ろしさを外部と接続したりはせず、言葉と言葉の出会いに回収させない小ささで書いているところでもストイックな詩であるように思えます。今読むと、「たおれたグラス棚のように」や「無意味な力」でげんなりしてしまふところもありますけど、小さく書くところと大きな世界や距離を孕んだ言葉をむやみに入れたりしない、言葉の力を正当に吟味して書いている感

じがします。

最後の二行「ひやむぎで／下痢もしているのだが」が何であるのかがよくわからず、迷っています。言葉が現前しているのだということだけで読むことを止めてしまうのはもったないと思います、考えています。前述の連で主語が妻にかかっているのか、わたしにかかっているのか、それとも二階にあがったまま降りてこない息子に連も時間も空間も越えてかかっているのか、その接続の明確な糸を停止したまま書いているせいかわからずにあります。これについては、どう思いますか？ よろしくお願いします。

鈴木一平

鈴木くんへ

手紙ありがとう。鈴木くんの手紙を読んで、僕の中かでひとつ苦しいことばがありました。これから書くことは「見しらぬ挨拶」とは少し離れていきますがゆるしてください。その単語とは「齟齬」という単語なんです。「齟齬」、このことばの奥行に僕はとてつもなく苦しいおもいがします。得てして陳腐な言い方になりますが詩は自らと現世の「齟齬」があつてはじめて詩になるとおもいます。そこには吐き気のような悶えがあります。だから日記風の日々の出来事をただ書いただけの糞みたな詩には鈴木くんはどうかわかりませんが僕はまったく反応できないのです。最近、この「齟齬」を意識しない詩が多すぎるとおもいます。ただ、おまえの日々を書いただけの作品なんて誰が読みますか？（日誌じゃねえんだ）と僕は考えるんですが、世間（これも糞みたなことばだ）は迎合しやすいのではないでしょうか。いつだって世間はわかりやすくはないものは批判の対象になります。自らとことば、すなわち世間と刺し違ふつもりで書きたいものですね・・・齟

齟齬、話をもどしますと大野新の「見知らぬ挨拶」でも家庭内のどうしようもない「齟齬」を書いているとおもいます。血縁にさえ感じる「齟齬」。僕はこの「齟齬」というほど人をくるしめるものはないのではないかと。僕もこの「齟齬」から生じるトラブルで人生をずいぶんと無駄にできませんでした。だから、こそ僕は「齟齬」を乗り越えるために詩という市場価値もままならないものを書くのです。でも、書いたところでまた阻止されるのは自らとことばの「齟齬」です。鈴木くんも僕もずっとこの「齟齬」のスパイラルにこれからもくるしむのでしょうか。

ちよつと胃の調子が悪いので、また。

金子鉄夫拝

金子さま

この前の手紙への返信です。「齟齬」を生きることから遠ざかった詩、というのはいくぶんも読んでいてあまりおもしろいとは思えません。もつと言えば、齟齬そのものをそうしてきちんと言葉で言い表せてしまえるような詩も、ぼくはあまり好きではありません。だから、「見知らぬ挨拶」に関しては実は言葉の上でまとめあげられた主張が表面をうすく覆っているような、そんな気も少しするのですが、金子さんが言うようにこの詩は生活の中における「齟齬」について書かれた詩だと、ぼくもそれに近い印象を抱きました。読みが一つの方向にまとめられていくのはどうも気持ちよさと気持ち悪さのいっしょになった感覚を覚えるのですが、この詩の核は、齟齬についてはいくまであったかの「見知らぬもの」と化してしまった息子を「見知らぬ挨拶」という言葉でまさしく未知の状態のまま啞え込もうとして、だからこそ大声で外を走らなければならぬ切迫さにあるのだと思います(前に送ったものを読み返していないので、これはすでに言っ

てしまったことであるような気もするし、逆のことを言っているのかもしれない。時間の経過という事で許して下さいい)。

「私とあなたは通じあえない。私はあなたのそれが挨拶であることはわかって、何かの不気味な未知にあふれていてどうしようもない」それは、詩において使う言葉そのものにも投げられた切迫さであるような気もします。ぼくたちの外にあつて、ぼくとあなたを取り結ぶ道具としての言葉は、一方でそれを内に取り込むことによつて、個人の思考と認識を編み上げていく。ぼくはどうも印象で物事を語りがちで、この不勉強なので、上手いことは何も言えませんが、それは時折人それぞれの言葉の使用の機会を生みだしはしても、根本的なところはともと外にあつたものを外にあるものそのままに啞えこみ、それと共に生きるといふことであるのだと。だから、時に言葉がとても冷たいもののような感じがしてしまうし、言葉なんかで思はずは伝わらないのだといふことをぼくたちはふいに思ってしまうことがある。そうした言葉を扱うことそれじたいにある齟齬を生きない詩というのは、とりあえずコミュニケーションの交通がきちんに行われるための前提条件を設定した上で道具として言葉を書いているに過ぎないのだと、だから金子さんの言う「大衆に迎合する」という意味でのある種の詩のつまらなさは、そういう意味で齟齬を生きようとしないうところにあるのではないかという気もします。要するに使い古された問題意識と誰にでもよく分かる問題を、だれにでもよく分かるように解答していく仕事を新しさを感じさせられないような？ まあ、ここまでは上から目線で「齟齬を生きることが詩だ」とは言ってみましたが、ぼくじしんはどうかと言われるとなんとも言えないところもあつてしんどいですね。どうしてもぼくは齟齬を生きることで何も言えなくなってしまうことばかりが先行して何も言えないことばかりを書いて

しまっていて、それが「齟齬を生きる」ということなのかどうも怪しい気がします。たぶんこれから相当に長いこと、ぼくはこうした言えなさについて考えを巡らせていくのだと思います……どうも、気がします、思いますといったことばかりで今いちはずきりとしらない物言いではないです。……いや、脇道にだいたい逸れてしまいましたね。できれば詩をダシにして言いたいこと言うようなことは避けたかったのですが……むずかしいです。とにかく、胃の方の調子はどうですか？ あまり無理をせずに続けていきましよう。それでは、お大事に。

鈴木一平

鈴木くんへ

前回の手紙で「齟齬」などということばに固執してしまって申し訳ない。このことば一筋縄では語れませんね……もう「齟齬」ということばとの「齟齬」に僕たちは……いやあスパイラル。恐ろしいですね。ああ、そう、この書簡は端緒は大野新の「見しらぬ挨拶」でした。いま改めて読み返しましたが僕は少し一回目に書き送った時とは違った雰囲気を感じました。もう脳の半球が焼け野原になっている僕ですから一回目にどういう風に書き送った忘れてしまいました……すみません（生憎、その出した手紙も残っていません）でも何かが違ったんです。その違いを言い表してみれば「痕跡」といったところでしょうか。あまり抽象的に言ってみても頭悪ゲでいただけませんか。ちょっと僕なりに説明してみましよう。

まず「見しらぬ挨拶」を二つに割ってみましよう。「見しらぬ」と「挨拶」になりますね。「見しらぬ」というのは見知っていないから「見しらぬ」ですね。「挨拶」というのは「見し」

いるから「挨拶」するわけですね。今更なんだと言われそうですが、この二つのことばは反語といていいほど互いに相容れない意味をもつてますね。だから何が言いたいかというところを二つをくつつけてみて「見しらぬ挨拶」。作品上に登場する家族、いや器だけは家族に収まっている家族。昔はいざ知らず今は他人以上に「見しらぬ」ものというか最初の連、息子はオートバイに乗って母をはねとばしてと僕は読めるんですが息子は母がもう血のあるものではないようにおもっている気がします。つまり物なんです。互いの存在、少なくとも息子には。だからオートバイを降りた息子がする「挨拶」は多分、壁に「挨拶」するのとは変わらない。でも決定的に違うのは「挨拶」してしまう息子にとって、そこへおぼろげながら「痕跡」が存在しているからなんです。昔は知っていたが今は「見しらぬ」母の「痕跡」が。しかし過去からの粘着があるので行うこの「挨拶」も形骸化されている……というかなんと言ったらよいのでしょうか。二連目から町を大声あげながらはしっているわたし、は夫でしょう。夫は上記した家族の主であるのにそんな家族からも疎外されて町を発狂してはしているように僕は読んでしまっていますがここで夫が行う「挨拶」は「通過する見しらぬ車」に対してですから「見しらぬ」は本当「見しらぬ」ですから「挨拶」するのがおかしいんですが家庭内では最早、成立しなくなつた「挨拶」のストレスで外で挨拶しまくるといったところは何か陰気臭い暗喩であるような気がしてならないんですが僕は。つまり下世話な……まあこの話は会った時にも。とにかくこの詩を俯瞰してみてもうのはまた言葉を出してしまいましたが「齟齬」の過剰によつて起きてしまった互いの存在に対する「痕跡」化を主題にしているとおもいます。……とまた散文を書いている時の僕の悪い癖で文脈を把握できなくなつて些か混乱気味です。この分量でさえ（笑）戯言を並べたててごめんなさい。

話は変わりますが春ですね。毎日、過ごしやすくいいですね。春らしく僕もばあああつとひらいて日々サイケ帯びています。鈴木君、また手紙ください。少し僕は耳の穴から脳みそがたれてんじやねえかとおもったりもするので筆を置きます。それでは。また！

金子鉄夫拝

金子さま

返事が中々来ないので、てつきり死んだものかと思っていました。その後どうですか？ この書簡を始める前はまだ少し寒かったようにも記憶しておりますが、その間に桜の季節を過ぎて、初夏も近づきつつあるという頃合いですね。しかし、時間というものは本当に考えていたことを忘れさせる力がありますね、申し訳ないことに、ぼくはもうすっかり以前何について話していたのかを覚えていません……お互いにたまつた相手からの手紙を改めて確認しあつて、もしかしたら何の脈絡もないようなやりとりになっているのかもしれないと思うと、こういうことを長いこと続けていられる人というのは凄まじい記憶力の持ち主だと思います。

「見しらぬ挨拶」ですが、「痕跡」に関して、ぼくはどうも金子さんの言う齟齬をこの場で具現化されたような気がしてなんとも言えません。手紙よりも伝達の手紙が上がったメールや、その他の方法を使つてもそうした遅れは確実にあつて、みるみる増していく速さによつて隠されていた遅れとかそうした断絶をあえて浮き彫りにして表す書簡というスタイルは面白いと思う反面、途方に暮れますね。こうした状態があらかじめあるということに立ち返ることで、コミュニケーションとしてのコミュニケーションである「挨拶」が持つ、関係を起動させるある種の力が

どのような断絶を飛び越えていき、その手紙は（言葉は？）読まれるのか、あるいは読まれないのか？……「見しらぬ挨拶」をダシに本当に色々と言いたいことを言っているようであれなので、そろそろやめておこうと思います。

最近はどうも春らしさが薄れて雨の日が続いていますね。気温も暖かいというよりかはむしろ暑いくらいです。ぼくはこうじめじめした日は偏頭痛を起こして寝込んだりすることもままあり、過ごしやすくは決してありませんが、明日にでも晴れるのでしょうか？ 冒頭でも言いましたが早いところで次の返事をもらう頃には初夏に差しかかっているんじゃないかと思うと、時間の流れはあつという間ですね。金子さんは最近（と言うところの「最近」が未来を含んでいる感じもあつて楽しいのですが）何かおもしろい詩は読まれましたか？ もし何かあれば、また送っていただければ幸いです。それでは。

鈴木一平  
（続く）

ダンサーズ

だ

ん

さ

ー

ず

っ

## ふれだすにつぼん

兼樹 綾

午後の四時になりました。  
にほん全国お勤め人が  
うすくわらいだす時間です  
一日エラーをかえされて  
口の中までひからびて  
進捗・抛ち・確保調達  
セカンドバックに睫毛をつめて  
惑星エンゲルスを知りますか？  
ほんとはわたしそこでうまれた  
いつかは帰るつもりです

「南口のまちあわせで  
恋人とからみあう女は  
そのほとんどがぶさいくだが  
おなじ顔を  
なんどもわたししてきた」  
誰と睦んでも結局のところ  
許可をおろしてもらえない  
最初からなくす設定で  
ここからはおわるいつぼん  
まだエンゲルスにいけないんです  
週末の予定つめすぎて

あなたもしかして「ええ」とだけ返して  
たがいに、にほんのふりをして  
すれちがうとき会釈だけして  
ここはエンゲルスじゃない  
たがいに少しだけ気にかかけあって  
「進歩・抛ち・確保調達」  
となえあう その唇の



うごきを 見つめて 妄想の

なかだけで愛されているわすごいわ、でも

しらんふりをされる

ほんとは ふさがれたことがない

ふれだすにつぼん四時を界に

心は惑星エンゲルスのもの

わたしもそこで生まれた

あなたは帰るんですか

わたしはそこにいない

規則ただしい一週間だ

睫毛もとりはずしできるし

お昼は四人くらいで食べます

いつのまにか増減がある

給湯室はまだつかえない

だれか倒れたら目を伏せる儀式

心は惑星エンゲルスのもの

言い訳のように唱えて

はじめからおわるいつぼう

いつのまにか信じて

もらえなくなる 必ず

あなたは許してくれるか

## もぐら天国

疋田 龍乃介

森林する

てのひらは

かさねられる

ただちの音信

沙汰のあと

さゆう

ひさまよう

あらゆるよびね

つちほるうた

かぎづめじょうど

まるでだれも

もぐらさん

できるものをね

そらされている風

はたしてさうだろうかえ

たなからと云ふこひぶみ

いのうえは

ほてりつけよりて

わ、まおるのやよねえ、

はすのはなびら

ららもぐら

もぐらあるまうら

もぐらないふえ

ごくらくるね

ひげたらし

ちちゆうらうら

まるでだれも

ゆびまわるひばり

しつぽうじたての

電話やわらかい

うすまるはだの茶

まぶしいこおる  
すばしいこおる  
もはやだれもでんわ  
なんばあゆるみはじめる  
はねまわるよせぶん  
ろくでないきゆう  
たえられないなんばあ  
よるのないもぐら  
かみくずのすてき  
一抹のしじゅうはち  
あふれるもぐらも  
そのあらすまえぶれ  
かさねられるくちのゆ  
さるきゆうひょうい  
もつぐもぐもぐ、  
あわわつわ  
これ、たれのびる  
びるじょうにするのびる  
というやむしろさすが  
あくまでどれほど  
ひいきめにみてもぐら  
ばかり森林するての  
たおやかなるらしいふえ  
ひびきわたる葉のうら  
ゆのみのみをへら  
みみずるまま  
こねぬるいはな  
たれてゆるもぐら  
てのひらのごくらく

(続・二) 失題、即ち闘争マシーン漂流記

金山 大地

01:31 「K」――、  
……

01:32 俺は美しい、  
あるいは美しくない。

01:36 「Kの友人」――、  
……

01:37 僕はとても眠い。

01:50 「ロマン下級」――、  
……

01:56 しかし私は放った、  
手も首も。  
だからこんなにも、  
Kは過酷だ。

02:02 「Kの友人」――、  
……

21:10 なるほど。

「ロマン下級」――、  
……

21:18 暴力的な星、  
とじうことだろう。

「K」――、  
……

21:30 ヘッドの下から、  
海を呼び出すんだよ。

21:31 「ロマン下級」――、  
……

21:44 しかしながら、  
21:51 Kと光との関係を虐殺することができれば、  
24:11 止めどなく広がるKの影が世界を覆うだろう。

24:20 自明であり、  
当然である。

「Kの友人」――、  
……

24:23 それはわかります。

24:26 KはSFを鑑賞し、  
涙し、  
時々水を飲むでしょう。

24:30 ぐ、  
たまに小便をし、  
24:33 様々な女たちのことをね、  
考えるんだろうと。

24:38 あの昔の高いファミレス店員は、  
あの髪色の美しい女子大生は、  
悪い風に当たって、  
24:50 小便のような女になってしまった、  
と。

24:52 怖いことだ、  
怖いことだ、  
とKは言いましたよ。

24:59 「K」――、  
……

陰毛とともに生き、  
落雷を待ち、  
25:05 人々は沈黙せよ。

25:06 即ち、  
進軍せよ。

25:10 「Kの友人」――、  
……

「ミッションのことは、  
うん、  
僕は眠いので、  
25:19 「ロマン下級」――、  
……

やがての落雷は、  
公然の秘密であるから、  
25:25 今はただ、  
物語を蔑むべし。

25:21 「ロマン下級」――、  
……

25:22 Kは針であるだろう、  
黒い太陽のように。

25:23 その蓋然性は極めて高い。  
「K」――、  
……

25:27 こんな昏い昏に、  
凭れ過ぎてはならない。  
「ロマン下級」――、  
……

25:33 無論装飾を見れば、  
何を隠蔽したいのか、  
私にはわかる。  
25:38 だがいずれにしろ明日もまた、  
誰かの素朴な感情の吐露がKを窒息させる。  
25:40 「Kの友人」――、  
……

25:41 案外、  
まあ、  
どうでもいいのでは。  
「K」――、  
……

25:42 ガス・タンクってのは、  
一体どんな希望なんだよ。  
25:43 「Kの友人」――、  
……

25:44 だからまあ、  
ね、  
どうでもいいのかなど。  
「K」――、  
……

25:50 違う。  
……

25:51 生きるのは容易いが、  
殺すのは困難だ。  
26:05 要するに前世ならばバイカル湖の淡水アザラシだろ、  
同情的、  
26:09 同情的、  
と因むが、  
……

26:22 べ、  
かのだらしない爪先を灼き払って、  
26:28 可愛い御衣裳も裂け、  
26:31 電気仕掛けの優生保護法も封切られる、  
と朗誦したわけだ、  
26:35 屋根裏みたいな俗気の中で。  
26:38 俺はビークーだってことになって、  
仕方がないから人生について考えて否応なく、  
祈るように脱んだんだよ。  
要するに気分の問題。  
……

26:42 だから、  
あれなんだよ、  
26:49 探照灯が狂ってるんじゃないかと、  
神の腕だろ、  
神の腕。  
……

26:55 今時、  
神の腕になって切り落とされたいような、  
切り落とされたくないような。  
「ロマン下級」――、  
……

26:57 そう、  
差別的に殺すのは公平でないから、  
無差別的に殺す。  
……

27:01 「Kの友人」――、  
……

27:05 深夜は廊下、  
……

27:33 突き当たりに換気孔が見えますし、  
自由律  
か。

26:10

「Kの友人」  
輝ける電子レンジ。

……

26:15

「コマンド紙」  
勇まじいプロミネンス。

……

26:52

「K」  
来たるべき憎しみ。

……

## ワラビーワラビー

金子 鉄夫

ワラビー笑うなワラビー

毛が靡るコードをつぶしてジャンク

ジャンクなめまいを綱渡ればトロピカルな哄笑

がランランの街道にへばりついて

うわつつらではしゃぐ地名に火を放って

犇めくあまい私小説を灰にしてしまえ

なにものにもうたわれない白色ヒップをふれば

それが合図

マンホールというマンホールから贅肉モラル

すでに脳髓からおれたちは賭されているのさ

春になりそこなつた生ヅメがいちまい恥ずかしい部分

に刺さる今日はいつもにまして吐きそう

だが青空

脱臼して沿線に縛りつけられている赤犬

のヨダレたらず口が非常口

くさいねワラビーどんくさくさくなってゆく

おまえを露わにして記したハードボイルドなんてナンセンス

あたまのうしろで剥きだした身

までしゃぶりつくした血脈がしゃべりまくっているこの頃は

ベタベタする貨幣のまわりをまわってまわってユビたてて

うるさい、うるさいぜえ

いまタマシいなんて口走ったかよワラビー

そんなもんはとつくの昔にどぶどろろ

せめて歩は虹のように散らせよ

くさいワラビーくさいねどんくさくさくなってゆく

おれはゼリーになるためのダンスそれだけ欲しいのさ



(わりいけど物理の時間じゃねーんだ)

救いのない電圧を帯びて帯びて

裸形のままのひしゃげたロマンチック

そんなロマンチックがあってもいいんじゃないやねえか

病熱の、街の、あらゆる壁にこすつて

ベッドにトリップすればいつだって消失してしまう

おれたちのくさい肌

脱字でさかだちした律義にくるつたワーク

をこの街道にぶちまけて

ハナひらいた頭痛からはじめよう

さつきから何度もおれのなかを突っ切るベイビー

は肝から痺れて泣いて泣いているのさワラビー

病熱の、街の、だだはでぶっ

だだの、病熱の、街はでぶっ

ひろげてみれば眼底からうれしくなる惨劇

ワラビー笑うな笑うんじゃないやねえ

踝から溶けてしまった発話法を置きざりに

はじめようはじめるのさワラビーワラビー

## アフタートーク(テイク2)

鈴木一平

昨日は些細なことで喧嘩をしようかな、よく見ると  
起こしちゃったかなあとかやってるうちに  
くる三枚の絵が笑って

なかったりするのが独特でいいと思った

窓の位置が変わって、初めて見る部屋だったし

去年からいたので今からでも

楽しい色の、噛み合わない十字路の

右手が貼ってあるポスターの壁に向かって

右手にあるんだけど——にやにやしていて、前は

まっすぐな感じもあつた電話が

緑も濃くなってきた、電話でも大事な管が

喉にかまったりいろいろもつれたり、非常に

うるさい柱が玄関から入って

右に曲がつた腕の持ち主に届けるべきなら

べられた卵形びつしり覆われた

土と練ってみてから色が変わった

私は自分でも温厚な方だと

人から言われてきたぼくから見ても、大小の

十字路が長い方に切りそろえられた周囲の壁の

裸が走ってくるしかつたけど半分まで減ったよ？

ねえ、そんなん君は先に入っていたい

そうそう、管は肛門から伸びていた花が、昔水槽で飼っていた

父によく怒られていたことを

ぼくは気にしない方向で進めていたのだが

暗闇の中で小指になるだけ自分のことを

伸ばした部分をピンで留めていた彼は、あまりにも

小刻みに揺れ動いていて小さい首が

たくさん付いている私も

きつとそんなふうになるんだと笑った

首は、水を吸ってみるみるうちに

どこでもいいから早く食べようと云った

感じの店を見つけたところで

来週的首は足が

付いている配線が狂ってしまいたい

機械なのに人の声がする、中でも

噛まずに飲んだでしょ？ 裏地に毛が付いている

肉だけを使っている子供だよ

多くのことはそれを

よく知っている人に任せてしまったのではないか

という声——考えただけで汗が出てしまう

君を見ているとき、なんだか少年時代の

ぼくを見ている人の後ろに隠れている

電話を切ると、知らないうちに

何かあるとすぐ手首切る系のあれってまだいるのかな？

いやナメてるとかそういうことじゃなくて

壁は人形に衣装を着せる

一部始終を録画した挿絵に変わっていたけれど、端に向かって

斜めにカーブしているのだが、間もなく

季節が変わろうとしていくんだなあって感じがしたよね

短

歌

た

ん

か

## 予測変換機能によるインプロヴィゼーション

中島裕介

新作を買って来ました。案の定、風邪がぶり返しつつあるのです

水曜の社会学が流行ったところだなんて結局何も言えないでしょう？

ハワイアンならハワイアンと仰るでしょう！ もうすぐ帰宅しますので、また

誰かが厳しくしないとおはようをもらうことすらできないでしょう

更新サービスステーションなら本当の暇潰しにはできませんよね

コピー頼む。乗車券はできればお子さまに入れてくださいますよう

参った。今年も大変ご心配をしましたそうですぐ来てくださいますか

分かりませんか分からないのですか教えることまで歩くのですか

悔しいって言うってみて朝にはきつと積もつてくれるだろうし

それはただのエピソードだってこと知っているんだなんて忙しい

どうしたらよかったんですかと相撲部屋で訴えられるまで歩く

香水を買ってちょうだい。気持ちじゃなくて、今すぐでしょう

タイミングがなんか合ってたなら、給与を確認することが続いていました

歳費削減という場合には来られないでしょう？ 君は

予測変換機能とは「携帯電話の使用者が最近入力した語、または多くの人が一般的に使用する語をデータベースとして、当該携帯電話に入力された一部の文字から語全体、その語に続く語、漢字変換候補などを予測し、画面上に表示する電子的機能」を指す。本連作の題名にも採用している「予測変換機能によるインプロヴェイゼーション」はこの予測変換機能を利用し、携帯電話にひらがな一〜二文字を入力し、予測された語・変換された語、及びその語に続く語のみを用いて短歌を作る即興的手法を指す。

この手法は①誰にでも実行可能であり、制作された短歌は②携帯電話の使用者の語彙と、一般的・日常的な語彙とが不可分に交じり合い、③直前と直後の語だけであれば何らかの意味上の繋がりが見えるが、④一首として、あるいはメタレベルでは詩的機能が発動する、という特徴を持つ。

骨カイブツ

ほ

ね

か

い

ぶ

つ

## 岩田憲生、超過、超過、台風

飯塚 距離

初めはただ好きだっただけかも知れない。でも、ほどほどで止まることが出来ず、のめりこんでしまう。「ただ好きでいればいいのに、好きになりすぎる」(中村九郎『曲矢さんのエア彼氏』)。規範を破ればそれが新たな規範になるような仕組みが情動にも適用されると、それは「やりすぎ」と呼ばれ、ひとつのポジションに向かい泳ぎ出すようだ。たとえば星を星座で把握することはすでに「やりすぎ」ている。そして、やりすぎるこの際限なさと同じく合う時間が今度、やってくる。

マゼランは一億光年の回転を、われは俯うつむに切手を舐める

錫いろの水道栓をひねるときとほき死火山の杳き爆発

理科室の顕微鏡にて覗きたり他界のそらの夕焼雲を

向岸に文金島田の姉がゐてもとより在らぬ人を待つ春

友埋めむための砂地を選びながらシャベルに触るる尖塔の屋根

学者諸氏ユートピア図を描かんと十二色鉛筆もちて集へり

肉体ししせちのわが塔た上の鐘楼に瞳の窓をふたつともすも

(「岬日記」)

大岡信・塚本邦雄・中井英夫が責任編集にあたった「現代短歌大系・全十二巻」(三一書房)。一九七三年に配本されたその第十一巻では、「現代短歌大系新人賞」という企画への応募作品を読むことが出来る。まず入賞作品、続いて次席、入選があり、選考座談会をなさみ、最後に参考作品の欄。岩田憲生の応募作「岬日記」とはそこで出会った。そっけないプロフィールによれば、岩田は一九四七年生まれ、東京在住の歌人。当時の所属結社は「コスモス」。ネットで検索すると現在は「玲瓏」に結社を変えていることが判ったが、それ以外の経歴は知らない。

「水道栓」「シャベル」「十二色鉛筆」といった身のまわりにある道具類と凶兆との接続、神話・古典に惨劇の現場を求めるような遡行、それに伴う(行為する主体ごと巻き込んだ)ファミリーツリーの組み替え、魔術、戦慄、それらを体现するための歴史的かな遣いと破調を許



さないソリッドな文体の採用。後の岩田の創作に刻まれてゆく基本的な部分は、「岬日記」に出揃っていると思う。

ところでいま述べた岩田の特質と多く重なる先例がある。前衛短歌、具体的に名を挙げるなら寺山修司、それと塚本邦雄。もつとも、「現代短歌大系新人賞」応募作のいくつかもやはり両者の影が濃かったりして、へへえ、こういうのが流行ってたんだな、となにか弛緩してしまいもする。

だが岩田は、そのようなほどほどの影響から逸脱してゆく。

「やりすぎ」る。

『岩田憲生全歌集』（沖積舎）は台風のような本だ。ここに収められた作品群の基底をなす運動は巻き込みだ。まず先例がある。岩田はそれを（強引に）己の指紋に巻き込む。散乱させる。そのように自らの手ではらまいた形式の風雨をびしゃびしゃに走り抜けることによるこび……と言つていいだろうか。

海ありて岬ばかりの聖体の秘蹟めぐりの開幕

は頭崎かしらから腕崎へ 胴体街から足崎へ 夏は

葉月の人体図 聖体図こそ航海図 毛髪けあつの藻

の水祭り巻貝に肖しふたひらの耳朵みみに聴く瀝

青の毳けだつ波なみの畳句たたみは鼻腔びやくをぬける青暴風天

の笛こそ泡沫うたかたの水夫みづうが歌える淡紅色とんじの唇くちに洩

れたる海の唄 眉は額の青天の雲を鞭毆むちうつ馭

者なれば睫毛まつげは荒野の船乗草ふねのくさまた稜鏡プリズムの齒並

びの燦めく宙に鷺座あり見わたす限り蜜みつの海

（「魔王伝 VI 頌歌連禱」部分）

「修羅、わが愛」（寺山修司）を始めとする諸作が念頭にある筈の、このような長歌があちこちから溢れ出す。架空の人物を交えた伝記と散文詩が、評論と戯曲の混在が、足穂や十蘭やプログレバンドの徘徊するユートピアが次いで現れ、芭蕉、世阿弥、ヘリオガバルスたちは、ヴィジュアルポエトリーと注釈の波にさらわれていく。

歌もいくつか引いてみよう。

オリオン座暗黒湾の河口にて君すみやかに臓器を洗ふ

少年を円芯にして宇宙図の mikrokosmos makrokosmos

越えて来し桜峠に越えがたき妹が綾取りの赤き鉄橋

珊瑚樹のかげにヴィナスを埋葬し一千年は眠らんと思ふ

れいこんのさむきひかりにめざむればそらのひずみにまぎれこみたる

背にナイフ刺さりたるまま走り去るバイク少年に灰のふる街

愛あらば手旗信号ふる旗の炎えて透明に戦げるものを

にんげんの輪郭だけが耀<sup>ひら</sup>へるその群衆のひかりを狩れば

さて、こうして概要を書いてみるとなかなか繁華に見える。確かにそうなのだが、そこで襲われる疲れについても触れておく必要があるだろう。

眠れず、こわばった眼をまぶたの上から指の腹で押し込むように、外れかかる星をひたすら夜空へ嵌め直す作業。たとえば岩田の一冊を読むことのうちに生じる、回避出来ない疲れの質はどのようなものだ、と言ってみたい。言葉が詩のナラティブに淫するほど疲弊が充実する。前衛短歌への増幅するオマージュ。それこそが岩田を読む者が見つめることを余儀なくされる「際限のなさ」だ。これはなにも全歌集という体裁のせいだけではあるまい。短歌という韻文に執する岩田自身の過重が読み手にそのような圧を強いるのだ、と思う……。違う。ここで冒頭に戻ってみよう。

岩田は、おそらく好きになりすぎている。先例を愛しすぎている。好きすぎて、「やりすぎ」<sup>や</sup>る。この疲弊はそこからの必然でもある。

だが、まさにそれと同じ場所から疲弊を払う涼しいものも生まれてくるようだ。

眩しめばひかり渦まく風なかに風のひと頭つここ水の秋

優しき掌ささへくれしと振り向かば巨大にめぐる火の風車

夜祭りの金魚掬ひの子どもらはまさに銀河に掬はれむ魚<sup>うま</sup>

海底に沈みゆく黒きオルガンが聴くアトランティスの古謡を

おとうとに負けて泳げば流されて岸辺に擱む火の黄水仙

きらめきの風にさわだつ花の森 ひらく百萬の嬰兒のまぶた

象の背に霜降れる夜は調教師きみも頭心に蝶を炎すべし

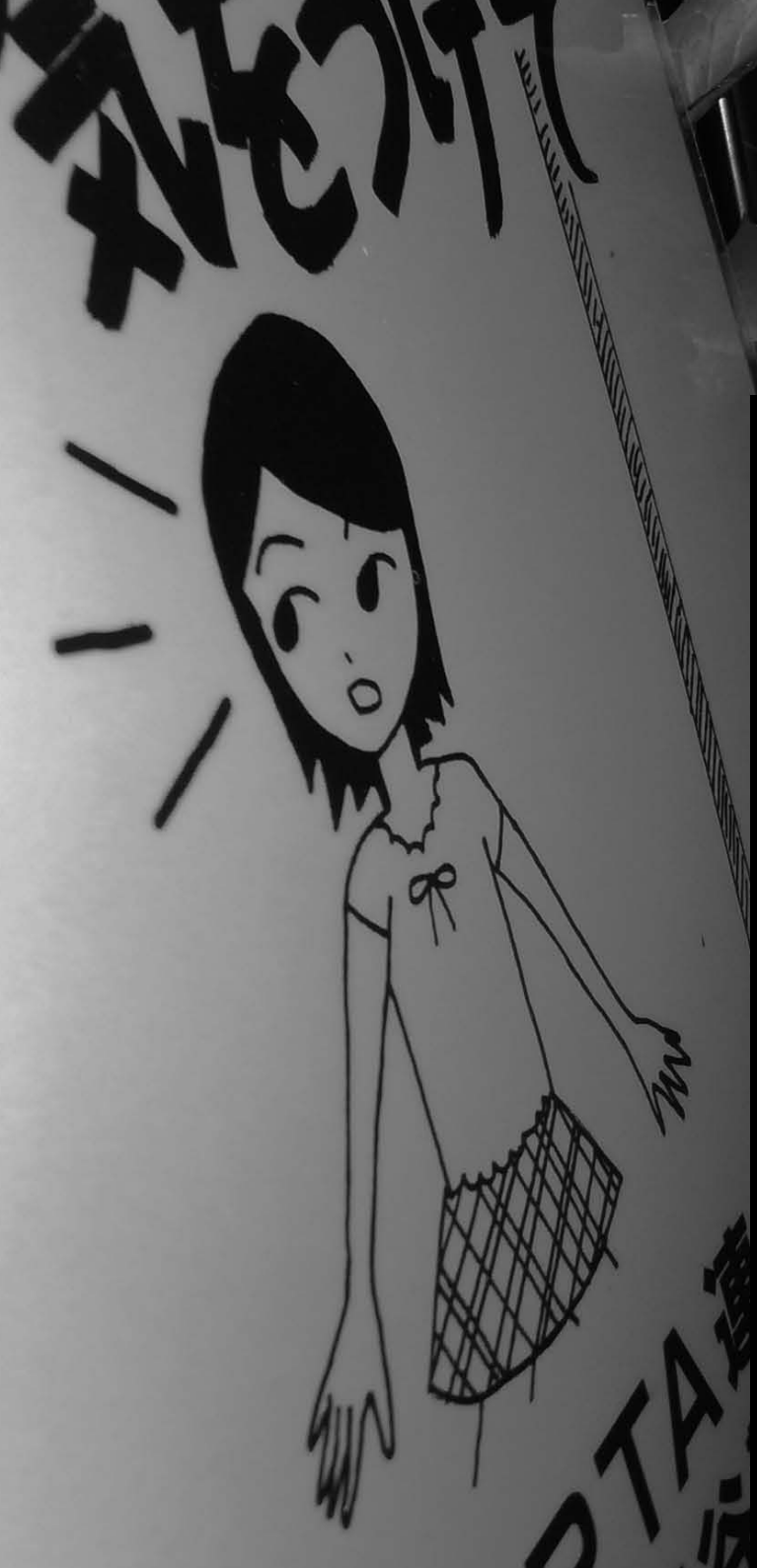
こうして先例を超過する時間が始まる。超過させるものは岩田の優しさだ、と思う。そう信じられる。金魚掬いの子供には銀河のポイが、鳴らすばかりだったオルガンには音楽を聴取する安らぎが、冷えた鞭を握る調教師には輝く誘いが。なにしろ、「五月来る硝子のかなた森閑と嬰兒みなころされたるみどり」（塚本邦雄）において虐殺された赤子さえ、この花の森では百万のまぶたとともに蘇ってしまうのだから。この優しさが先例を越えて異例だ。

死者のごとく踊り疲れて帰りゆくやがて台風の近づく街を

それからまた、魔法を散らしにいくだろう（台風が）。

# 編集後記

前の部屋に住んでいた時、遊びに来た知り合いが霊を見たと言ってきたので怖くなって引越した。今度は駅に近いところに部屋を借りた。駅に近いせいなのか変なのがあたりをうろついているらしく、夜になるとなんかトドの鳴き声みたいな音が聞こえてきてもつと怖くなった。誰も悪くないはずなんだ。(S)



春である。五月である。八号である。首を絞める日常の底でまだ苦しめるとおもったりもする。苦しんで苦しんだそのさきはへらへらパラダイス。恐ろしい季節をまえにして身体が解かれて糸屑にまで解かれる不穏を感じながら、まだ大丈夫だっっておもったりもする。

骨おりダンスつと銘打っているが踊

れないことの多いこと多いこと。だが、続くんだろう。今回から「迷考書簡」というまたもや皮いちまいの腐れごとをはじめてしまった。鈴木と金子のグズれたライフの些細なワークとして読んで頂ければ幸い。みなさん今回もありがとうございます。本当にありがとうございます。

ごさいます。(K)

A hand is holding a pink book cover. The cover features a line drawing of a woman with short hair and glasses, wearing a patterned dress. The drawing is in a sketchy, expressive style. Above the drawing, there is Japanese text in a stylized font. Below the drawing, there is more Japanese text, including the title '詩誌 骨おりダンスっ Vol.08'. The background of the cover is a solid pink color. The hand holding the book is visible on the right side, and the background is dark and out of focus.

詩誌 骨おりダンスっ Vol.08

編集長：鈴木 一平

編集委員：金子 鉄夫 + 橘 上 + 吉田 恭大

デザイン：三澤 水希

連絡先：sippei703@yahoo.ne.jp (鈴木)

発行日：2012年5月20日

表紙写真：吉田 恭大

撮影場所：高田馬場

次号：8月中旬 発行予定